

ハスカップと勇払原野、そしてわたし

NPO 法人 苫東環境コモンズ

事務局長 草 苺 健

一昨年ころから、ハスカップについてなにがしかの記録を残しておこうという気になり、やっと今年の正月に『ハスカップ保全に旧苫東会社が果たした役割と成果』といういささか硬いレポートを手がけたところでした。昭和 51 年から 4 分の 1 世紀近くの間、苫東の自然の保全と景観形成を仕事にし、退職後の 15 年近くもボランティアとして同じフィールドに関わってきたわたしの中では、大事な案件ではありながら、サラリーマン生活の前半どころか、人生そのものを振り返るような、とても静まる心楽しい余技的書きものだったせいでしょうか、優先順位がほかの雑事に押され押されていつも列後にまわされてしまっていました。そんな 5 月半ば、ハスカップに関するこの原稿依頼がきました。やはり今回もあのオリジナルレポートをあとに回して、この原稿に取り掛かることにしました。ここでは未完のそのレポートに立ち至った経緯だけ書いておこうと思います。

何故記録に残そうという気になったのかと申しますと、いすゞ自動車の開発行為の際、一帯のハスカップ自生実態調査を担当し、苫東と農協、企業、市民などへの 10 万本近い移植を手がけ、子会社のハスカップ事業（ジャムとワイン）を手伝い、ラベルのデザインもしていた私からみて、ハスカップの自生する勇払原野の、とりわけ苫小牧のハスカップ事情が大きく二つの意味で悲観的にならざるを得ないことに気づいたのです。ひとつは、ハスカップと人のつながり。もうひとつは、ハスカップそのものです。

ハスカップと人について言えば、ちょうど一昨年の夏ごろ、苫小牧のハスカップに関するある研究会からハスカップの話をしてくれというリクエストがあり、その会員 10 名ほどに、1 時間ほどハスカップの自生地の様子、苫東会社の移植プロジェクト、王子製紙栗山山林木育種研究所との調査研究を柱にして話をしました。その結果、ハスカップへの思いは地域固有の資源としてはある程度漠然と共有されてはいるものの、そこまでであり、驚くほどハスカップを取り巻く内実は放置されているのがわかったのです。ハスカップのブームは数回あったような気がします。所詮ブームであり、継続的に生き延びているのはいろいろな商品や催し名にかぶせられるハスカップという名称と、「よいとまけ」に代表される一連の食品シリーズだけかもしれません。

もうひとつのハスカップそのものというのは、ハスカップが原野から消え始めたということです。わたしはいわゆる従来の自然保護というような立場で申し上げているのではありません。ハスカップという勇払原野の個性を身を持ってケアしようという主体がどこにもいないのではないかと、ということでした。実はハスカップだけでなく、勇払原野という風土に対して、不動産や地の利や自然環境など色々な側面からのアプローチはあっても、それは一過性のフローであり、人の営みの中でつぎはぎだらけになった、「B 級の自然」勇払原野に向き合っている人は一握りもない、ということでした。そのシンボルとしてなのか、ハスカップは枯れ始めています。高らかに自然保護を訴えるのではなく、ここに住んで死んでいくことになる者として、悲しくハスカップのことを思うのです。ハスカップの運命なのか、人の不作為なのか。

NPO の活動の中でできることは限られていますが、神社の境内を掃除するような敬虔な気持ちで、勇払原野という土地の神様である産土（うぶすな）が多少は喜んでくれるような、そんな営みをしていきたいと願うものです。

2012/05/21